

《再会の森》 自生植物調査記録中間報告

1 調査方法

会員が調査を実施するには、まず、〈再会の森〉に生育する植物の種類や見分け方を覚えることが必要でした。そのため、旭川帰化植物研究会代表である塩田惇さんの指導のもとで、会員の参加者が植物の名称や特徴をメモしながら調査を進め、まとめて当たっても塩田さんの指導を戴きました。

2 表示項目

植物の名称、その植物が属する科、花の色、帰化植物、調査月日（5・7月は調査していません。また、木本類は省略しました。）、備考としました。備考欄には一口メモ的な事柄や特徴を簡単に記載することとしたため、必ずしも学術的に適正な表記とはなっていない箇所もあります。

3 表記順

まず草本類、木本類、シダ類、担子菌類に分け、科ごとに植物名をアイウエオ順に並べました。また草本の科は、原色日本植物図鑑（保育社）にしたがい、合弁花類（キク科～ムラサキ科）、離弁花類（セリ科～クワ科）、単子葉類（イネ科～ガマ科）の順に表記しています。

さらに木本の科は新版北海道樹木図鑑にしたがって表記しています。そのため、科はアイウエオ順にはなっていません。

4 参考文献（順不同）

- ◎北海道の野の花最新版 谷川弘一、三上日出夫編 北海道新聞社
- ◎新版北海道樹木図鑑 佐藤孝夫著 亜璃西社
- ◎北海道絵とき検索表（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ） 梅沢俊著 エコーネットワーク
- ◎新北海道の花 梅沢俊著 北海道大学出版会

（西 朋子・平田 孝則・柚木 茂恒）

今回の調査で確認できた植物のうち、主な科の特徴は次のとおりです。

キク科

小さな花が集まって頭状の花序をつくる、そのまわりを総苞が取り巻いている。総苞は多くの総苞片からなりたっている。小花は、さきから5つに裂ける筒状のもの、さきが5つ又は3つに裂ける舌状のものがある。世界に広く分布し、凡そ1,000属、23,000種あるといわれている最も人きな科である。

《再会の森》 自生植物調査記録中間報告

草本類

植 物 名	科	帰化 植物	花の色	調 査 月 日				備 考
				6. 21	8. 23	9. 21	10. 18	
アメリカセンダングサ	キク科	帰	黄			○		果実のトゲに特徴あり。
アラゲハンゴンソウ	キク科	帰	黄		○	○	○	別名キヌガサギク。茎や葉に毛が密生。
エゾゴマナ	キク科		白			○	○	夏から秋にかけて咲く。
エゾノコンギク	キク科		青紫～淡青紫		○	○		葉の縁はギザギザ。
オオアワダチソウ	キク科	帰	黄		○	○	○	茎や葉はざらつかない。真夏に咲き、花が終わると泡立ちのようになる。
オオハンゴンソウ	キク科	帰	黄		○	○		他の植物に影響を与える外来植物なので、抜いても勝手に移動させない。
オオヨモギ	キク科		褐色		○	○		カンタンが産卵する。8月上旬～2ヶ月くらいなく。
コウゾリナ	キク科		黄		○	○		葉や茎はざらつく。森の土手側に生育。
セイヨウタンポポ	キク科	帰	黄			○	○	総苞片が反り返る。
ヒメジョオン	キク科	帰	白	○	○	○	○	畑や花壇の雑草。
ヒメムカシヨモギ	キク科	帰	参考欄参照			○		小さな頭花は白色。総苞は淡緑。畑の雑草。抜き取りやすい。
ヒヨドリバナ	キク科		白～薄紅		○			中・下部の葉が対生。ヨツバヒヨドリがある(3～4枚の葉が輪生)。
ブタクサ	キク科	帰	褐色		○	○		9月は花粉を出す時期。花粉症の原因植物。
ブタナ	キク科	帰	黄	○				花はタンポポに似ている。
フランスギク	キク科	帰	白	○				日本で園芸上マーガレットと呼ばれるものは日本名モクシユンギクのことで、フランスギクとは別。
ユウゼンギク	キク科	帰	赤紫～青紫		○	○		葉は茎を抱く、花色は変化多い。
アマチャヅル	ウリ科		黄緑		○	○		5～6mmの小さな花。
ミヤマニガウリ	ウリ科		白		○	○		結実時、白い花が残存。
ヘラオオバコ	オオバコ科	帰	黒褐色		○	○	○	10月は葉が残存。
ビロードモウズイカ	ゴマノハグサ科	帰	黄			○	○	既に開花終わり。二年草(花を着けるまで2年かかる。)。葉と茎に毛が密生。

植物名	科	帰化植物	花の色	調査月日				備考
				6.21	8.23	9.21	10.18	
メマツヨイグサ	アカバナ科	帰	黄		○	○	○	誤って、ツキミソウといわれることがある。
ウツボグサ	シソ科		紫		○	○	○	夏～秋にかけて咲く。 10月は花が終わりかけ。
ノハラムラサキ	ムラサキ科	帰	青	○				近年、庭や畑でよく見る。花はワスレナグサより小さい。
ヒレハリソウ	ムラサキ科	帰	淡紫	○				別名コンフリー。 葉や茎にかなり毛が多い。
ワスレナグサ	ムラサキ科	帰	青	○			○	10月は土手側の森の縁。ノハラムラサキより花が大きい。 水辺に多い。春～秋に開化し花の色は変化が多い。
オオハナウド	セリ科		白	○				草丈 1.5 ～ 2m。
シャク	セリ科		白	○	○	○	○	別名コジャク。山菜の一つ。
ヒシ	セリ科		白			○		沼地に生育。水面に浮く。
オオタチツボスミレ	スミレ科		紫			○		別名クサノスミレ。地上茎がある。距が白っぽい。
ツボスミレ	スミレ科		白			○		地上茎がある。
キツリフネ	ツリフネソウ科		黄		○	○		別名オコリンゴ。果実をつまむと、はじけて種子を飛ばす。
エゾタチカタバミ	カタバミ科		黄			○		茎が立っている。 草丈 20 ～ 30cm。
ゲンノショウコ	フウロソウ科		白		○	○		現の証拠…胃腸のための薬草。
クサフジ	マメ科		赤紫～青紫		○	○		土手側の森の縁。 フジの花に似ている。
シロツメクサ	マメ科	帰	白	○	○	○	○	別名シロクローバー。 幸せを呼ぶ四つ葉のクローバーが見つかるかも。…(^^)
セイヨウミヤコグサ	マメ科	帰	黄		○	○	○	在来種より草丈が高く、花数が多い(本種は3～7個)。
タチオランダゲンゲ	マメ科	帰	淡紅		○	○		住宅他などでよく見かける。 土地を耕した後で。
ムラサキツメクサ	マメ科	帰	赤紫		○	○	○	別名アカツメクサ、アカクローバー。花を吸うと甘い。
オニシモツケ	バラ科		白		○	○	○	9・10月は開花終了。 草丈 1 ～ 2m。
キレハイヌガラシ	アブラナ科	帰	黄	○				畑や花壇の雑草。
コンロンソウ	アブラナ科		白	○				花の白さを、中国の崑崙山(こんろんさん)の雪に譬えてこの名が付いたといわれている。

植物名	科	帰化植物	花の色	調査月日				備考
				6.21	8.23	9.21	10.18	
ハルザキヤマガラシ	アブラナ科	帰	黄	○				早春タンポポと同じ時期に咲く。
ウシハコベ	ナデシコ科		白	○	○	○	○	花弁は5枚(10枚に見える)。
カラフトホソバハコベ	ナデシコ科	帰	白			○		よく分枝し、斜め上に伸びて広がる。
ヌカイトナデシコ	ナデシコ科	帰	淡紅			○	○	園芸種(矮性カスミソウ?)が野生化。花弁に赤いスジがある。
ノハラツメクサ	ナデシコ科	帰	白	○				種子に白っぽい突起がある。
アキノウナギツカミ	タデ科		淡紅			○		葉の先はとがり、基部はハート形。川辺でよく見かける。茎のトゲは逆刺(下向きのトゲ)。
イヌタデ	タデ科		紅			○	○	葉鞘に毛がある。
オオイタドリ	タデ科		黄褐色		○	○	霜枯れ	雌雄異株。雄花は多数、上向きに咲き、9月に脱落。雌花は鱗の集合体状で、受粉後、垂れ下がる。
オオイヌタデ	タデ科		紅(白もある)			○		花穂は湾曲。草丈1.5mくらい。群落を形成する。
ミゾソバ	タデ科		淡紅		○	○		別名ウシノヒタイ(葉の形から)。水辺に多い。下向きにトゲがある。
エゾイラクサ	イラクサ科		緑		○	○		触れると痛痒い。春先は山菜として食べられる。
カラハナソウ	クワ科				○	○	○	8月は花あり。蔓が丈夫。ホップの仲間
キンエノコロ	イネ科		穂が黄金色			○		別名キンエノコログサ
ヨシ	イネ科		褐色		○	○		穂が褐色。「アシ」と呼ばれていたが「悪(あ)し」に聞こえるので「ヨシ」に変えられたといわれている。
サジオモダカ	オモダカ科		白~淡紅			○		沼地に生育。
ミクリ	ミクリ科		淡緑		○	○	○	沼地に生育。貴重種である。
ガマ	ガマ科		黄褐~褐色			○	○	沼地に生育。

木本類

植物名	科	帰化植物	花の色	備考
エソノカワヤザギ	ヤナギ科		—	葉のつけ根にととも小さな托葉あり。
エゾノキヌヤナギ	ヤナギ科		—	葉の裏面に絹毛が密生し、銀白色を呈する。
エソヤナギ	ヤナギ科		—	托葉は大きくて丸い。ノブドウが下にあるものは樹名板を取付ける候補木。
オノエヤナギ	ヤナギ科		—	別名ナガバヤナギ。葉の縁が少しギザギザ。葉脈に特徴。
シロヤナギ	ヤナギ科		—	樹皮は剥がれやすい。大木(樹高20m)になる。

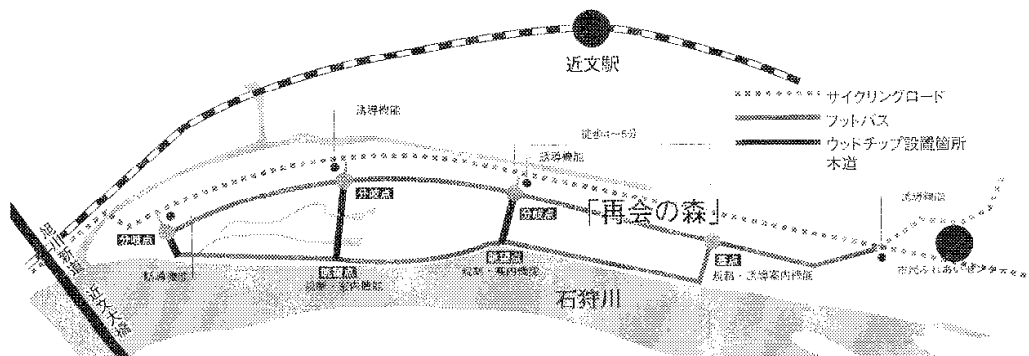
植物名	科	帰化植物	花の色	備考
タチヤナギ	ヤナギ科		—	若葉は赤褐色。葉の縁に細かい鋸歯。樹皮は剥がれやすい。再会の森ではこのヤナギが多い。
オニグルミ	クルミ科		—	樹名板を取り付ける候補木。
ケヤマハンノキ	カバノキ科		褐紫	葉の裏面に毛が多い。
ミズナラ	ブナ科		黄緑	葉に大きく鋭い鋸歯あり。果実は長楕円～楕円の堅果(ドングリ)。
ヤマグワ	クワ科		備考欄参照	雄花：淡褐色。雌花：緑白。
イヌエンジュ	マメ科		黄白	熊などの彫り物の材料になる。
オニツルウメモドキ	ニシキギ科		淡緑	再会の森の見事なオニツルウメモドキはシンボルツリーとして保護したい。葉の裏の葉脈に白く細かい毛(小突起毛)のあるものはオニツルウメモドキ、ないものはツルウメモドキ。
ノブドウ	ブドウ科		黄白	実の色が緑・青・赤紫に変化。
ミズキ	ミズキ科		白	土手側の森の縁。枝は紅紫～暗紅色で、正月のマユダマ飾りに使われる。
カンボク	スイカズラ科		備考欄参照	花の中央部の多数の小さな花(両性花)は淡黄緑。まわりの装飾花は白。この個体は実の着き方が少ない。クジャクチョウの幼虫？が多数ついていた。果実(赤)は薬用。

シダ類

植物名	科	帰化植物	花の色	調査月日				備考
				6.21	8.23	9.21	10.18	
クサソテツ	メシダ科		—	○	○	○	○	10月は葉が褐変。春の山菜(コゴミ)。

担子菌類

植物名	科	帰化植物	花の色	調査月日				備考
				6.21	8.23	9.21	10.18	
エノキタケ	キシメジ科		—			○		森の道ばたや川の縁でよく見かけた。



ゴマノハグサ科

多くは草本、ときたま木本（キリなど）。葉は托葉がなく互生、対生又は輪生する。花は両性(※)で、左右相称。花冠は合弁で4～5列、通常は多少2唇形である。

両性花(※)

ひとつの花で雄しべと雌しべがあるもの。但し、雄しべと雌しべがあっても、どちらかが機能的に退化している場合は両性花とはみなされない。…マタタビ科マタタビ属のサルナシ(コクワ、シラクチヅルともいう。)の雌木に咲く花(機能的に雌花)の雄しべは、雄しべとしての機能はない。一般に、マタタビ属の植物(マタタビ、ミヤママタタビなど)も同様である。

シソ科

多くは草本、まれに木本(ラベンダーなど)で、通常、香気がある。

茎は方形で、葉は托葉がなく対生又はときに輪生、まれにすべて根生する。花は両性で5個の花弁が合成した筒状を呈し、先が2唇形となった合弁花冠を持つ。花形はゴマノハグサ科のものと似ている。

広く全世界に分布する。

スミレ科

葉は互生(まれに対生)で托葉があり、明瞭な小葉がない(単葉)。花は単生又は円錐花序をつくり、両生で左右相称又は放射相称。花弁は5個、不同で下側の1個は距がある。多くは閉鎖花(※)をつける。

閉鎖花(※)

被子植物の花にあって花冠を生せず、開花せずに蕾の状態のまま受粉し結実に至る花をいう(開放花の対語)。

ホトケノザ、スミレ属、キツリフリ、カタバミ属、ハコベ、ミゾソバ、ツユクサなどにみられ、いずれも開放花を合わせもつ。

マメ科

草本又は木本(ニセアカシア、キングサリ、イヌエンジュなど)、ときには、つる性。葉は互生して托葉があり、多くは複葉。花は両性、多くは左右相称で蝶形、まれに放射相称、花弁は5個、豆果をつくる(通常、他の科の植物から識別するための特徴)。世界に約550属、13,000種あり、熱帯地方に多い。バラ科に類縁がある。

バラ科

草本又は木本、葉は互生し、托葉がある。花は放射相称、通常、両性で、5数からなる。本科は凡そ100属、3,000種を含む大きな科で世界に広く分布する。また、温帯果樹の主なもの(リンゴ、ナシ、モモ、サクランボ、ラズベリーなど)を含み、観賞用に栽培される樹木も多い。ユキノシタ科(アジサイ、スグリ、ネコノメソウ、ダイモンジソウなど)や

マメ科と近縁と考えられる。

アブラナ科

大部分は草本で葉は互生、ふつう托葉はない。花は多くは総状花序につき、両性、放射相称、通常、苞や小苞はみられない。がく片は4個（2+2）、花弁は4、果実は莢果で隔膜がある。ダイコン、カブラ、キャベツ、ハクサイなど多くの栽培植物がある。また地中海沿岸地方からの帰化植物として日本に入ったものも多い。

ナデシコ科

草本、葉は対生して鋸歯がない。花は放射相称で4～5数からなり、花弁はある場合と欠く場合がある。凡そ80属、2,000種あって、主として北半球の温帯（近東から地中海地域に多い。）に分布する。サクラソウ科とよく似ており、近縁であると考えられている。

カーネーションをはじめ、マンテマ属（シラタマソウなど）、カスミソウ属など園芸植物が多く、ハコベ、ミミナグサ、ツメクサなど身の回りの植物としても馴染みの深いものが多い。

タデ科

草本まれに低木。葉は互生まれに対生することもあり、多くは鞘状の托葉をもつ。

花は両性、まれに単性（イタドリなど）、花被片は、ふつう白又は紅色、放射相称、しばしば穂状又は総状の花序をつくる。約30属、3,000種あり、世界に広く分布（主に北半球）する。

イネ科

草本まれに木本。そう生するか又は仮軸の地下茎から円形の茎（稈）がでる。葉身は線形。花は数個から1個が穂状につき、小穂となる。

約650属、10,000種と世界に広く分布する。単子葉類では風媒花として最もよく進化した科である。人類の重要な食糧である穀物（イネ、コムギ、オオムギ、キビ、アワ、トウモロコシ、サトウキビ、オートムギなど）はイネ科の種子である。草食の哺乳類の重要な飼料でもある。さらにタケなどの工芸品・鑑賞用として利用されるものも多くて、人間の生活には欠くことの出来ない重要な科である。

ヤナギ科

ヤナギ目の唯一の科である。落葉性の高木又は低木。材は軽くてやわらかい。

葉は単生で互生する。雌雄異株。花は退化したもので、尾状花序につき、仮被はない。種子は短命である。主に北半球の暖帯から寒帯に5属、400種が分布する。

カバノキ科

主として北半球の温帯に産する落葉性の高木又は低木からなる小さな科で、シラカンバ

(シラカバともいう。)やハンノキなど温帯では最もよく知られた樹木が含まれる。

材や樹皮、ナッツを利用するもの(ハシバミなど)がある。

葉は単葉で縁に鋸歯があり、互生する。花は放射相称、単性、雌雄同株。1個の苞と複数の小苞があり、1花あるいは3花がつく。この1花あるいは3花が1本の花序軸にらせん状に多数集まって円柱状又は楕円状の尾状花序を形成する。ふつう葉に先立って開花する。

雄性の花序は長く下垂するが、雌性の花序は短く直立するものが多い。

用語解説

花被 = 花冠(花弁)と萼の総称。外花被と内花被に分けられ、色や形ではっきり区別される場合に、それぞれ花冠(花弁)、萼という用語が使われる。また、花冠が裂けて、幾枚かに分かれている場合、特に花弁という用語が使われる。

唇弁 = 左右相称の花で、下向きの人きな花弁(花冠裂片)。ふつう唇形をしているか、アツモリソウのように袋状になることもある。ラン科、シソ科、ゴマノハグサ科などに見られる。

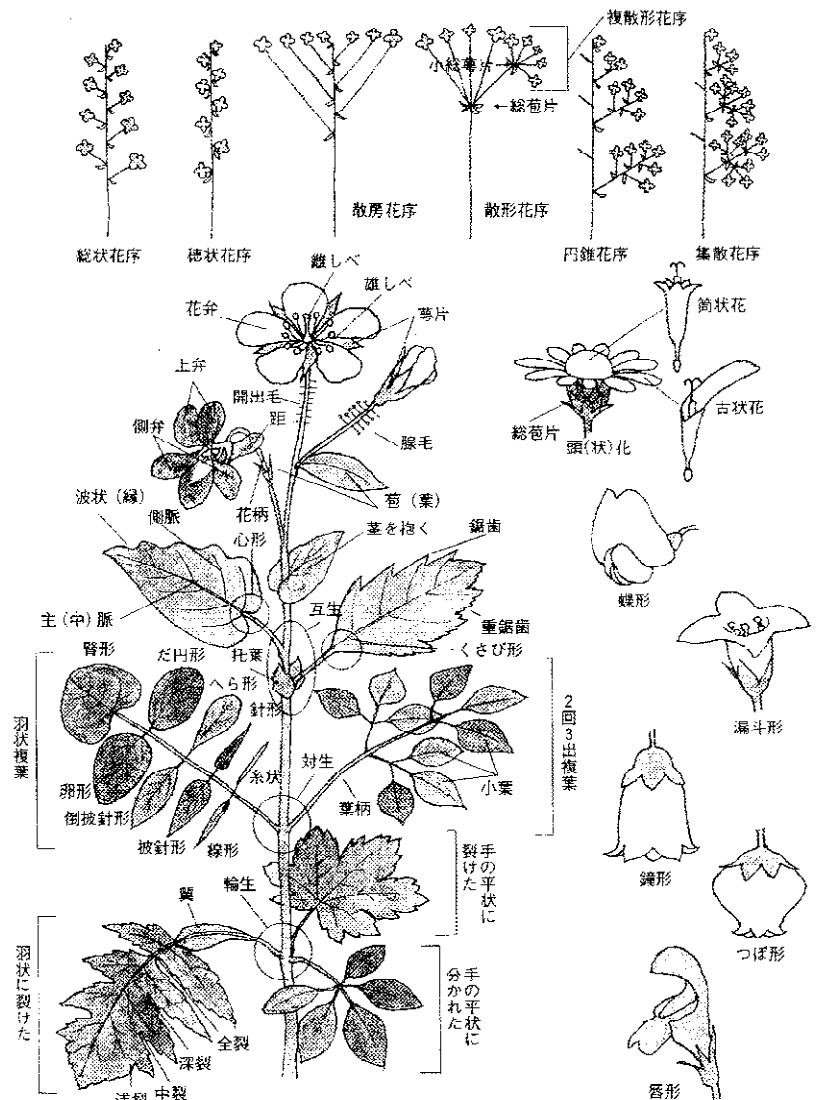
側弁 = 側花弁。唇弁の両側にある花弁

距 = 花方や萼の一部が細長い袋状となつてとび出している部分。

葯 = 雄しべの先の部分。花粉をつくる器官。雄しべの残りの部分は、**花糸**という。

柱頭 = 雌しべの部分。ここで受粉する。雌しべの残りの部分は**花柱**といい、**子房**につながっている。

ずい柱 = 雌しべと雄しべが合体した器官。ラン科などにあり、葯の中には花粉の集合体である**花粉塊**が入っている。



用語解説及び図は梅沢俊著 北海道夏~秋の花 絵とき検索表Ⅲより

^{しゅういしゅ}雌雄異株＝雌花と雄花が別の株につくもの。^{しゅうどうしゅ}雌雄同株＝雌花と雄花が同じ株につくもの。

^{ちゅうせい}中性花＝雄しべ、雌しべが退化して、花被だけになった花。エソアジサイやオオカメノキ

の飾り花など。

^{しょうか}小花＝複数の花が集まって1つの花をつくるとき(キク科の頭花、イネ科・カヤツリグサ科の小穂など)その構成単位となる花。

^{とうか}頭花(頭状花序)＝小花が多数集まり、一つのように見える花。キク科やマツムシソウ科に見られる。

^{ふくよう}複葉＝1枚の葉が、複数の小葉に分裂した葉。分裂の仕方は^{うじよう}羽状、^{しょうじよう}掌状(手の平状)などになる。

^{たくよう}托葉＝葉のつけ根につく、葉状、突起状などの付属体。

^{ようえき}葉腋＝葉や葉柄が茎につく部分の上部。

^{ごせい}互生＝葉や花などが互い違いにつくこと。

^{たいせい}対生＝葉や花などが1対ずつ向かい合っにつくこと。

^{りんせい}輪生＝葉や花などが一カ所に何枚も輪状につくこと。

^{とうけい}倒形＝葉などの形で「倒」がつく場合、中心部より先端部の方に一番幅の広い部分がある。

^{ほうよう}苞葉＝芽を包んだり、花序の基部につく葉。ミズバショウの^{ぶつえんほう}仏炎苞は花冠状に変化したもの。

^{そうほう}総苞＝多数の苞葉が花序の基部にまとまったもの。キク科、セリ科などに見られる。

^{ちかけい}地下茎＝地表より下にある茎の総称。根に見える^{こんけい}根茎、^{かいけい}塊茎、^{りんけい}鱗茎などの種類がある。

^{そうしゅつし}走出枝＝地表をのびる茎。ところどころで根と芽を出して増える。

^{かいしゅつもう}開出毛＝軸に対してほとんど90°に近い角度で生える毛。

^{ふくもう}伏毛＝寝たように生える毛。

^{しゅくもう}縮毛＝バーマメントをかけたように縮れた毛。

^{せんもう}腺毛＝先が丸くふくらんだ毛で、分泌物を出すことが多い。

^{こうぼく}高木と＝高さ2mくらいで分けられるが厳密なものではない。高木は太い幹が直立して上部で枝分かれし、低木は地表付近で幾本にも枝分かれする傾向がある。